総説，空気，飲食，衣服，住家，婚姻，交媾，妊娠，小児期（5歳迄），幼年期（自5歳至20歳），成年期（自20歳至40歳），壮年期（自40歳至70歳），老年期(自70歳至100歳)，人生の快楽，疾病を発するの原因及び其注意(即ち予防)，伝染八病之原因及予防法(赤痢，梅毒，疥癬など)で終っているが，更に「人間長寿法付録」として，米国人ウヰルリアム氏撰，○人間福利の階級，米国人ゼームスアストン氏撰，○資質の区別，○気力の強弱など内外の名言のみでなく心身医学面からも説かれている．生命保険は初版のみであったが，この外科之部は表紙に訂正三版とあることから，当時多くの一般人に読まれたものと思われる．しかし，挿図はない．

なお，生命保険には緒言がないが，外科之部には緒言があり,「余曩に病理問答を著し世に公けにせしに幸に世俗の用ゆる処となりければ這度復其二篇を著す此書の説く処は主として外科に関すること…附日此書の標題に至ては或は識者の譏を免れずと雖ども之を科学の考にて読まず一般の考にて読まばよし載する処は「パトロギー」ならずとも病の事訳と解するになど支ふる事あらんさは云へちとの心掛りなきにはあらねど既に一篇にて世にありふれたれば今更名を改めんも惜しく此書も其儘病理問答第二編と名づけぬ」と記されている．これら両書から歯科口腔外科に関するものについて報告したい．

28）小島原泰民と歯科病理書

Y. Kojimabara and Dental Pathology

日本大学松戸歯学部　○山口　秀紀
向井　康子
石橋　　肇
谷津　三雄

Hidenori Yamaguchi, Yasuko Mukai, Hajime Ishibashi and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

森山らは第17回本学会総会において「わが国で歯科病理学と銘打った最初の書物は明治23年8月と12月に上•下巻が発行された小島原泰民の纂訳書の歯科病理各論で，病理学書であり，手術書である性格を有し，症候を記し，治療法を添記する方式である」と述べ，さらに，明治30年12月歯科病理各論全として再版されたことを報告している．

また，正木正博士も口腔病理学の歴史のなかで，わが国での最初の歯科病理学書は小島原泰民の“歯科病理各論”（上）明治23年8月，（下）明治23年12月であり，本書は明治22年に神翁金斉，高橋富士松，吉田仙正らが歯科矯和会という研究団体を組織し（矯和会は間もなくその名称を講義会と改めた）講師を招き，歯科学の講義を聞くとともに，毎月2回の講義録を刊行したうちの一つである．さらに，本書の基礎となったハーリスの歯科病理の原本は，1839年初版の“The Dental Art, a Paractical Treatse on Dental Surgery”(380ページ）を1845年に“Principale and Practice of Dental Surgery”（600ページ）に改題したものであり，さらに，この著書はその当時の歯科学を代表する著作で，著者の死後1896年(明治29年）までのおよそ50年間に13版を出したといわれていると記載してある．

演者らは，歯科病理各論下巻，明治23年12月6日出版，第13章から第28章，付録歯牙と煙草トノ関係，全247ページの1冊，小島原泰民纂訳，歯科病理各論上巻(明治23年8月刊行，第1章から第12章246ページ）と下巻（明治23年12月刊行，第13章から第28章，247ページ）の合本で，「完」と記されているもの3冊と，歯科病理各論，全，（明治30年12月発行，392ページ）の3種類計5冊を蔵しているが，各論上巻のみの単本は架蔵していない．

この後者の「全」凡例に「第13版歯科病理書を得て之を繙閲するに所謂大に面目を改め進歩の度頗る感するに堪へたり仍りて更に旧本を訂正し新説を増補して再ひ之を世に公にす」とあり，正木正博士の記載する第13版の訳本であることがわかる．

なお，本書は第1章から第22章よりなり，392ページで上下巻にわかれていない．また，本書には明治23年12月6日発行，明治30年12月25日再版発行とあり，纂訳兼発行者，小島原泰民，印刷所，発行書肆は初版と同じであるが，印刷者は初版の高橋富士松から野村宗十郎に変わっている．このことは歯科講義会が消滅したためであろうか．演者らは第11回本学会総会においてこの歯科病理各論完（初版）と歯科病理各論全（再版）

の両者を比較して報告した.

ところが小島原泰民纂訳の歯科病理学書を論ずる場合, 崎形歯論, 完, 明治32年11月30日発行, 全236ページ, 付図25がある. 本書の凡例に「大日本歯科講義会ニ於テ訳者カ米国歯科ノ泰斗ハーリス博士ノ崎形歯論及トンプソン博士ノ先天性缺失歯原因論ニ就キ傍ラ他ノ米国歯科大家ノ著書ヲ参照シ要ヲ摘ミテ訳述セル所ナリ蓋シ歯牙ニ於ケル朽傷ハ一ニ其崎形ヨリ起ルヲ以テ崎形ノ原因ヲ知ル甚ダ緊要ナルヤ論ヲ俟タズ」とあり, 本書の原典とその主旨を知ることができる. 目次からその内容をみると,「歯牙ノ構成上及発育上ニ於ケル破格, 崎形久歯, 連合歯, 融合歯…黴毒歯, 生歯ノ遅速, 生歯欠絶, 歯牙ノ先天性欠失及崎形ノ原因（遺伝, 雑種, 文野, 食物, 神経障碍疾病, 薬物及人工病)」などからなっている. この「崎形歯論」を中心に報告したい.

29) 明治期歯科医学書の文体・用語法の分析的研究（その1）

保歯新論を中心として現代語との関係を考える

An Analytical Investigation on the Style and the Wording of Dental Books in the Meiji-Era (Part 1)
A Consideration of on "Newer Knowledge in the Preservation of Teeth" Compared with the Contemporary Japanese

東京歯科大学　森山　徳長
○高崎　一郎

Norinaga Moriyama and Ichiro Takasaki, Tokyo Dental College

明治新政府の文教政策は, 五箇条の御誓文に象徴されるように, 全てを一変させる革命であった.

歯科文献が明治12年に初めて小冊子が出版され, 14年には伊澤道盛の『固齢草』と高山紀斎の『保歯新論』が刊行された. この両者は漢文を基礎としながら, 変体平仮名交り文と片仮名交り文というように対照的文体で書かれた.

明治憲法の制定は10年後であるが, 漢字片仮名交り文が, 公用文としての正統性を獲得した. 20年代以後の歯科文献もそれにならうものが大勢を占め, 30年代40年代の歯科医学文献もその形式を踏むようになった.

その創めとなった『保歯新論』の現代語との間を埋めるものは何であろうかとの設問の下に, 第247回例会において発表したが, それらを整理体系づけて発表したい.

しかし『固齢草』に代表される漢字平仮名交り文も, 一般向き歯科啓蒙書も数多く書かれており, 高山紀斎自身も『保歯新論』の内容を現代風にいえば, 患者教育用パンフレット式に『歯の養生』と題して, 16頁の小冊子として明治16年, 17年また22年と出版している.

それは漢字平仮名交り文で書かれ, 難解な漢字にはルビが振ってある.

その様な時代的背景に在って高山が歯科医学文献に漢字片仮名交り文を用いたのは, 一つの見識を示すものであったと評価される.

高山は明治19年に出版した臨床歯科薬物学ハンドブックと, 明治25〜28年に高山歯科医学院で出版した, 講義録を素地とした5冊の教科書でも漢字片仮名交り文を踏襲して, 公用文に近似した文体を完成した.

今回は最初の文献『保歯新論』に限定して, その文体・用語法の特長を述べる.

1）文体　漢文読み下し文の日本語. この時期に文体が已に確立していた.

2）文字　漢字は康熙字典体にやや近い楷書体. および片仮名（変体仮名は少ない). その他, 漢文訓読由来の特殊文字が若干.

3）符号　読点「。」はなく, 句点「、」のみ. 文末には打たない. 段落分けはあるが, 文頭の一字下げはなし.

4）文法　文語体だが難解な言回しはない. 仮名遣は正確で誤りは非常に少ない. 送り仮名はかなり恣意的で統一がない.

5）語彙　現代人にとって以下の語彙（およびその表記）が違和感を覚えるであろう.

現在では仮名書きが一般的なもの. 漢文読み下しに由来するもの. 専門用語が現在と異なるもの. 予想より数は少なかった.

同訓類義字. 漢字の原義に従い, より細かく使い分けたもの.

以上について, 具体例を挙げて述べる心算である.